

ニュージーランドでは5年ごとに国勢調査が行われており、直近では2023年3月に実施されたところであるが、不詳の増加や財政上の理由により、次回の国勢調査は従来のやり方から大きく変更し、複数の行政情報を組み合わせて国勢調査として毎年公表するが、行政情報では得られない情報についてはサンプルサーベイを実施して補完する、という方法を検討している。この国勢調査の方針についての大きな変更は現在、ニュージーランドの人口学研究者にとって大きな関心事であり、今回の大会においても国勢調査や行政情報をテーマとして3つのセッションが企画され、活発な議論が行われており、大変興味深かった。

また、イリーナ・グロスマン博士（RMIT）による「小地域における将来人口推計」と題したキーノートスピーチは、AIや機械学習は人口推計のどのプロセスで活用されるのかを検討したもので、過去の趨勢を延長する従来の手法は依然として精度が高い一方で、販売予測などの分野では機械学習と従来型モデルのハイブリッドアプローチが最も精度が高かったことなどの事例が紹介されており、非常に参考になった。

今回の大会参加ときっかけとなったのは、昨年2024年11月にワイカト大学人口研究所の研究チームが当研究所に来訪したことであり、本大会で彼らと再会して意見交換できたことも大きな収穫となった。（藤井多希子 記）

## ASMB-JSMB2025 企画シンポジウム

2025年7月11日、京都大学主催のASMB-JSMB2025（於・京都テルサ）の企画シンポジウムにおいて、「Eigenvalue Problem of the Multi-State Age-Structured Population Model and the Population Structure of Japan」という題目で講演を行った。本発表では、多状態年齢構造人口モデルの固有値問題に焦点をあて、日本の人口動態の解析に適用した研究成果を報告した。特に、人口置換水準と固有構造の関係を理論的に導出し、出生率・死亡率・移動の各要素が定常人口に及ぼす影響を新たな人口学的指標として定式化した点を強調した。聴衆には数理生物学、応用数学学双方の研究者が含まれ、人口減少や少子高齢化に関する具体的な議論が展開された。今後の国際共同研究に繋がる貴重な交流の場となり、理論研究の社会的意義を再確認する機会となった。（大泉 嶺 記）

## 第30回国際人口学会大会（オーストラリア・ブリスベン）

国際人口学会（International Union for the Scientific Study of Population: IUSSP）の第30回大会（30th International Population Conference, IPC2025）が、2025年7月13日から18日にかけてオーストラリア・クィーンズランド州ブリスベンのブリスベン・コンベンション&エキシビション・センターで開催された。IUSSPは、人口問題に関する科学的研究の発展と学術交流の促進を目的として1928年に設立された国際的な学術団体であり、同年パリで開催された第1回会議以降、第二次世界大戦期の中断を挟んで継続的に学術大会を開催してきた。1965年以降は4年ごとに定期的に開催されているが、2021年12月にインド・ハイデラバードで開催予定であった前回大会はCOVID-19パンデミックの影響によりオンライン開催に変更されたため、対面での開催は2017年の南アフリカ・ケープタウン大会以来8年ぶりとなった。

開会式では、国連人口賞（United Nations Population Award）の2025年機関部門にIUSSPが選ばれ、本大会に先立って授与式が行われたことが報告された。開会式を除く5日間で、209のセッション